
謎解きはリボーンの後で・・・

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎解きはリボーンの後で・・・

【Nコード】

N3742Y

【作者名】

時雨

【あらすじ】

オリ主である高嶺 朱雀は目^{たかみねすざく}を覚ますと一つの部屋にいた。

扉から出てきた執事、黒野から今までの事を説明され親の計らいによつて並盛高校に行く羽目になる。

何かそこで？グローブやボンゴレリングに炎灯しちゃったり、原作とは一味違う技習得しちゃったり、んで何故か難事件に挑んじゃったり、様々な出来事が起こっちゃいます。楽しんで見てください。

目を覚ますと・・・（前書き）

初の二次創作なのでどうなるか分かりませんがどうぞご覧ください！

目を覚ますと・・・

目を覚ますといつもの朝だった。

眩しい朝日が窓を突き抜け部屋に入ってくる。小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。

いつも通りの朝だった。だが一つだけ違うところがある。

「・・・どこだここ？」

俺、高嶺 たかみねささく 朱雀はとある部屋のベッドにいた。

しかし、その部屋はただの部屋ではない。貴族様が暮らしてそんなあの無駄に広い部屋だ。

カチャ・・・。

すると、部屋の扉が開いた。

「あつ。お気づきになれましたか」

そこには黒のダークスーツ姿の男がいた。

「後気分はどうですか？」

「あの。一つ聞いても良いですか？」

「はい。何でしょう？」

「あんた誰？」

すると男は、

「ところで朱雀様。入学式の準備は整っておりますか？」

「入学式？」

「はい。明日は並盛高校の入学式でございます」

「え？俺そんなとこ受けてないけど」

「これも旦那様の計らいでございます」

あの野郎おおおおおおお！！！！！！！！！！
と、俺は心の声を必死に抑えながら、

「い、いや。ただけど」

「作用でございますか。それではご用意いたしましょう」

黒野は手に持っていたリモコンを操作した。すると、壁からそれはそれはなが〜いクローゼットが出てきた。

「えーと・・・これは？」

「こちらの中から一セット、制服を選んでいただきます」

「選ぶって・・・これ何種類あるんだよ・・・100はあるんじゃないか？」

「正確には112種類でございます」

「112！」

再び俺は目を丸くした。

「何でここまで作っただか・・・いつそ私服校の方が良かったんじゃないか？」

「それは同感でございます」

「しゃーない。とっとと選んじまうか！」

とは言っただものの、普通に一時間もかかってしまった。やはりここまで多いと時間はかかるわな・・・。

結局、俺が選んだのは上は黒のブレザー、下は白と黒のチェックのズボンだ。

「とてもお似合いですよ」

「そりゃどーも」

「では、次はカバンなのですが」

「まだ選ぶのか？」

「はい。これの他にも、靴、部屋、運動着、e t c・・・」

「あー分かった分かった。とにかくさっさと選んじまおう」

そして早速、バックを選び始めた。

バックは先ほどとは違い、三つに決められていたのですぐ決まった。俺は手下げ型のカバンを選んだ。

その後も色々ことは進み、すべてが終わったのはもう夕方頃だっ

た。

「やっと終わったー」

「お疲れさまです」

黒野はコーヒーを机の上に置いた。

「そういえば、ここから並盛高校は近いのか？」

「はい。歩いて15分の所でございます」

「チャリで10分といったところか・・・」

「自転車で行くおつもりですか？」

「当たり前だろそんな近いんならわざわざ車で行く必要無いだろう」

「いえ、そうゆう事ではなくて無いのでございます。自転車が」

「え！そうなのか・・・しょうがない。明日は歩きで行ってその後で買いに行くか」

そうしてかれこれ一時間経ち、時刻は10時半。

「もう10時半か・・・そろそろ寝るか」

こうして俺は慌ただしい1日を終えた・・・。

目を覚ますと・・・（後書き）

いやゝ何か見る限りほとんどオリジナルになってしまいました。

なんか・・・ねえ・・・（前書き）

第2話

いやゝ今回は前回よりも長くなってしまいました。頑張って読んでください。
あと少しグダグダです。

なんか・・・ねえ・・・

朝、俺はいつも通り目が覚めた。

ふとベッドの横を見ると荷物の入ったスニーカーがあった。おそらく黒野が準備したもののだろう。まったく、本当に準備の良い奴だ。必要な物は全部揃っている。

そう思いながら俺は昨日選んだ制服を身にまとい朝食を取り、出掛けようとした。その時、

「お待ちくださいませ朱雀様」

黒野が何かを持ってきた。

「どうした黒野？」

「これをお渡しするのを忘れておりました」

すると持っていた箱を開けた。そこには二つのリングと懐中時計があった。

「これは？」

「こちらは並盛高校から贈られてきたものでございます。なにも個人認識のようなものだとのことですよ」

ふーん。並盛高校って随分と変わってんだな。

「分かった。ありがとう」

俺はリングをチェーンに通し首にかけ、懐中時計はポケットに入れた。

「それじゃあ、行つてきます」

「行つてらっしゃいませ朱雀様」

）．．．．．）．．．．．

今、俺は一年生の教室にいる。だが．．．これは．．．ねえ．．．。

『後ろからクラス全員の視線を感じるんだが．．．』

分かりやすく言つてしまえば、I の第1話でゆう一的気分である。

ただ一つ違つとすれば、クラス全員が女子ではないことだ。ちゃんと男子もいる。

だが．．．その男子でさえも俺の事を凝視している。

怖いよ．．．怖いよパト ツシュ．．．。

「えー、皆さんこんにちは。それでは、我が校の説明をいたします。本校は入学式でも説明したように、自警団を育成するために様々な分野に取り組んでおります。」

ああ。そういえばそんな説明してたな。校長から。確か名前は沢田．．．綱吉だったかな。帰つたら黒野に聞いてみるか。こうしてまあ説明は終わつたんだが．．．未だに視線を感じる。すると一人の男子が近づいてきた。

「よっ！俺、山本 啓信^{けいしん}て言つんだ。よろしくな！」

その男子は他とは違い、どこか抜けているいわば天然な奴である。

「あ、ああ。よろしく」

俺は山本と握手をしたついでに、

「なあ。何で俺みんなに見られてるんだ？」

「何でって、そりゃあお前が大空の守護者だからだよ」

「大空の守護者？」

「そつ。大空の守護者はこの七部属性の中でも数少ない人間にしかないからなあ。だからお前新入生の言葉言わされたんだよ。ちなみに俺は雨の守護者だ」

ああ。そういえばあつたな・・・あん時は驚いたよだっていきなり新入生の言葉の書かれた紙を渡されんだもん。

「なあ。その七部属性には何があるんだ？」

「ああ。大空の七部属性には嵐、雨、晴、雲、雷、霧、そして大空の七つがある」

「へー」

「そしてそれぞれを色で表すと、嵐はレッド、雨はブルー、晴はイエロー、雲はヴァイオレット、雷はグリーン、霧はインディゴと言うことになる。みんなのリングを見てみる」

俺はクラスのみんなの指に目をやった。そこには、様々な色の付いたリングがはめられていた。
そこで気づいたのは、

「みんなほとんどデザインが違うんだな」

「まあな。リングのデザインによってそいつがどこに所属するかがほとんど分かる」

そこで山本は、

「そうだ。朱雀のリングも見せてくれよ」

「え？ああ。いいけど」

俺は首に下げていたリングを山本に手渡した。

「おっ！やっぱり朱雀もアニマルリング持ってるのか」

「アニマルリング？」

「ああ。アニマルリングって言うのはそれに炎を灯せば実体化して一緒に戦ってくれるとても便利なやつだ。ちなみに朱雀のは・・・これは、鳥だな」

「ふーん。で、もう一つは？」

「ああ。これは・・・」
すると山本の見目が変わった。

「これは・・・ボンゴレリングだ・・・」

「ボンゴレ・・・リング?」

「ああ。この学校の中では三つのAランクオーバーのリングを持つファミリーがある。シモンファミリー、ミルフィオーレファミリー、そして、ボンゴレファミリー」

「そのうちのボンゴレファミリーのリングがこれって訳か・・・」

「ああ。でもまあ良かったよ。お前もボンゴレで」

「・・・え?」

俺は頭の中に?のマークが浮かんた。

「まさかかとは思うが・・・山本、お前・・・」

「ああ。俺もAランクオーバーでボンゴレファミリーだ」

やっぱりか・・・。ん?てゆうことは・・・。

「なあ。俺達の他にも後5人いるってことか?ボンゴレのAランクオーバーが」

「まあそうゆうことになるな」

いったい誰だ?

「まあ一人はめぼしはついてるんだがな」

「え?誰?」

「俺の友人で嵐のAランクオーバーがいるんだ」

「そっか・・・んじゃあ明日会ってみるか」

「ああ。んじゃあ今日はこれで」

「おう。また明日」

そして今日は帰宅した。

～・・・～帰宅後、俺は黒野に校長先生について聞いてみた。

「なあ。黒野」

「何でございましょう?」

「お前、うちの校長先生について何か知ってるか?」

「校長先生と言いますと?名前は何?」

「確か沢田 綱吉だったかな」

すると黒野の手が止まった。

「ん?どうかしたか?」

「朱雀様、それは確かでございますか?」

「あ、ああ。そのはずだけど・・・誰なんだ?」

「あの方はボンゴレX^{デーチモ}。ボンゴレファミリー十代目でございます」

「え．．．ウソだろ．．．」

「もう帰っていらしたのか．．．」

「なあ。何でお前校長先生の事知ってるんだ？」

「私は．．．」

その後、黒野の言ったことは、

「私はボンゴレ十代目の守護者だからでございます」

「なん．．．だって．．．」

「守護者といっても正確には少し違いますが．．．」

「どうゆうことだ？」

「私の属性は確かに大空の七部属性なのですが、私は他の部隊に所属していました」

「他の部隊？」

「はい。私が所属しているのは．．．」

その後、俺は黒野の言ったことに耳を疑った。

「私が所属しているのは．．．チェデフCEDEFでございます」

「CEDEFってボンゴレとは独立した諜報組織でもあり門外顧問でもある組織だよな」

「作用でございます。良くございで」

「まあ友人から少し聞いたんだ」

「もしや、山本様では？」

「良く知ってんな」

「はい。彼はボンゴレ十代目、雨の守護者山本武様の息子にあたります」

マジかよ……。

その後、俺は黒野の話聞いた。話によれば、残りの守護者はあの学園にいるらしいのだが、それが誰かとゆうまでは知らないのとこのとだ。

まあその事に関してはいいや。明日からはちゃんと自転車で行けるから今日よりはゆつくりと行けるからぐっすり寝るとしよう。

こうして俺は眠りについた。

その頃、学校では、

「集まり始めたな・・・」

「ああ……」

「ボンゴレとシモンのような……」

校長室には二人の男がいた。

「オレ達の意志を継ぐ真の後継者が・・・」

その校長室には柔らかな月明かりが差し込んでいた・・・。

なんか・・・ねえ・・・（後書き）

まさかの黒野がCEDDEFとゆうオチ・・・。

次回も頑張ります！

（
（

ルームメイトはお嬢様？（前書き）

第3話

やっとヒロインの登場です。

ルームメイトはお嬢様？

翌日、俺は自転車で学校に行き、山本にある人物を紹介された。そう。昨日言っていた嵐のAランクオーバーの友人である。だが・・・。

「こいつが俺の友人、佐久間 翔太だ」
さくましようた

「誰が友人だ、ダアホ！」

その佐久間 翔太とゆう人物は見る限り少し不良っぽい感じの人物なのだが、どうも不良のように見えない。

え？どうゆう意味だつて？んゝ・・・分かりやすく言えば、なんとなくか見た目は怖いけど心は優しいってゆうあれだよ。ほらよくいるじゃん。見た目は不良だけど見かけによらず横断歩道でおばあちゃんを助けてたりしている人。あんな感じ。

「で、こいつが・・・」

「ああ。大空のAランクオーバーの高嶺 朱雀だ」

「ふーん・・・」

すると佐久間は俺の顔をまじまじと見た。
すると佐久間は、

「やっぱお前、綱吉さんに似てるわ」

「え？綱吉さんに？」

「ああ」

佐久間はあつさりと答えた。

「どこが？」

「まあ、なんとなくかわかんねえけど、とにかく似てる」

「は、はあ・・・」

こうして新たな仲間が増えた。

くくくくくくくくくくその日のHR・・・。
寮の部屋割りが発表された。

「えーと、俺は027号室か・・・」

部屋割りの横に寮への地図があるのだが、迷う所ではなかった。なぜなら・・・。

『あそこって学生寮だったのか』

そう、そこは俺と黒野がいるあの屋敷だったのだ。

『なるほど。どうりで無駄に広いわけだ・・・』

その後、俺は迷う事なく寮（屋敷）に着いた。
入ったところに山本と翔太がいた。

「お前らも寮生活なのか？」

「ああ。それで俺と翔太は同じ310号室になったんだ」

娘でございます」

へー。まあ、服装からしていかにもお嬢様って感じはするけどな。

「だから私の執事になりなさい！」

「ですからそれは・・・」

「かしこまりました」

「え？」

「わたくし私^{わたくし}があなたの執事となりましょう。お嬢様」

「朱雀様！」

「・・・あなたに出来るの？」

夏希が疑いの目で見てきた。

「ご安心ください。私、人のお世話は得意中の得意ですから」

「そ、そう。ならあなたに任せるわ。えーつと・・・」

「高嶺 朱雀ともうします。以後お見知りおきを」

こうして俺と夏希お嬢様の生活が始まった・・・。

ルームメイトはお嬢様？（後書き）

いやゝ。今回は朱雀が執事になるとゆうオチ・・・。
次回も頑張ります！

え〜っと・・・どちら様で・・・？（前書き）

第4話

今回はリボーンに出てくる“あの人”が登場します！

えっつと・・・どちら様で・・・？

翌朝、夏希は目が覚めるとそこにはエプロン姿の朱雀がいた。

「おはようございますお嬢様。昨日は良く眠れましたか？」

「ええ。おかげさまで・・・ところで朱雀」

「はい。何でしょう？」

「あなた何してるの？」

「見ての通り朝食を作っているのです」

朱雀は平然と言った。

「今ちょうど出来上がりました」

テーブルに出されたのはトースト、スクランブルエッグ、サラダ、
コーヒーだった。

「そう、ではいただくわ」

そして、今日も1日が始まった・・・。

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「俺は一足早く準備が出来たのでお嬢様を待つことにした。」

「ごめんね待たせて」

「いえ、ではまいりましょう」

俺は自転車の後ろにお嬢様を乗せ、学校に向かった。その途中、

「ねえ朱雀、今日の朝食とてもおいしかったわ」

「お気に召していただいて良かったです」

「あなたどこでならったの？」

「フッフ・・・それは秘密ですよ」

「えー。教えてよ」

こんな感じで歩いていると目の前に一人の男が現れた。

「おい、お前ら！」

「いいから、教えてよ」

「では、今度簡単なものを教えましょう」

「やった！」

二人はその男を素通りしていった。

「だから、ちょっと待てよ！」

男は少しキレ気味で二人を呼び止めた。

そして、俺は振り返り、

「何ですか？とゆうか・・・どちら様ですか？」

「俺は並盛高校2年剣道部主将、持田だ！」

そこまでは聞いてねーよと言いたい気持ちを抑え再び持田先輩の話を聞いた。

「高嶺 朱雀だったな。お前に決闘を申し込む！」

「は、はあ」

「放課後、剣道場にこい！逃げるんじゃないぞ！」

と、言つて持田先輩は去つていった。

はあー。どうしよう。しゃあない、行くか・・・。

~~~~~放課後、俺は剣道場にいた。だが何か様子がおかしい……。なぜならそこには剣道部員だけではなく一般生徒もいるからだ。

「なあ山本。持田先輩ってそんなに強いのか？」

「まあ去年、市大会で優勝したくらいだからな。」

「ふーん・・・」

話していると、持田先輩が現れた。その姿は剣道の胴着と片手に竹刀とゆう格好だった。

「待たせたな」

「どうやら決闘の内容は剣道勝負のようですね」

「ああ。一本を取った方が勝ちとなる。そして勝った方は賞品として、池沢 夏希を手に入れる事が出来る！」

周りからは黄色い歓声（？）が聞こえてきた。

「まあ何でも良いですけど、人を賞品扱いするのはどうかと思いま  
すが……とくにお嬢様となれば……ただじゃおきませんよ」

「うるせえ！とつと始めるぞ！」

「その前に僕の胴着は？」

そのんなのお構い無しに持田先輩は突っ込んで来た。

「無し……か……まいつか」

俺は竹刀を握り歩き出した。

「何もしてこないとは、ブアカの極みだな！」

「失礼ながら持田先輩、それはあなたの方ですよ」

すると俺は持田先輩の一撃を必要最低限の動きでかわし、

[illegible]

一瞬の事だった。

周りの生徒達は何が起こったのか分からずにいた。しかし、山本と佐久間は、

「勝負あつたな」

「だな」

すると、持田先輩の面が真つ二つに割れた。

「な！」

「一本・・・取らせていただきました」

「しょ、勝者、高嶺 朱雀！」

すると周りから一気に歓声が沸き起こった。

「ふう・・・終わったか・・・」

俺は竹刀を軽く振り下ろし、剣道場をあとにした・・・。

「・・・」時間過ぎて今は夕食の時間。夏希は朱雀の作った料理を食べていた。

「そっいえば朱雀」

「何でしょう？」

「剣道場の時思ったんだけど、あなた剣道したことあったの？」

「いいえお嬢様。一度もありません」

「ウソ！じゃあ何であんな動きが出来るの？」

「分かりませんが身体が勝手に・・・」



「へー。じゃあ『お嬢様を物扱いするのはただじゃおきませんよ』は?」

俺はあーと言い、

「失礼ながらお嬢様、我々執事の指名はなんだと思いますか?」

「え?それはこんな風に食事を作ったり掃除をしたり」

「それもちろん大事なことでございます。しかし最も大切なのは主であるお嬢様を守ることでございます」

「え?」

「お嬢様はこれから生涯誰かに支えられて生きていくとゆうことをお忘れ無きように」

夏希はその言葉の後、窓から見える月を眺めた。

えーっと・・・どちら様で・・・？（後書き）

持田先輩・・・、ご愁傷様です・・・。

次回は謎解きします！

殺しのワインはいかがですか？（１）（前書き）

## 第5話

今回は投稿が空いてしまいました。

そして今回は自己最長のページ数です「。 。 」

皆さん、頑張って読んでください・・・（ ）

## 殺しのワインはいかがですか？（１）

翌日、俺はクラスで話題になっていた。

そりゃそうだ。市大会の優勝者を一撃でしとめたんだもん。

「ねえねえ、朱雀君って剣道やってたの？」

「私も教えてほしいなあ」

こんな感じでずっと質問攻めにあっている。そんなところに、

「相変わらず人気だな」

「山本。俺の顔が嬉しいように見えるか？」

「いや、どっちかつつと、疲れてるように見える」

「あたりめーだ！ここまで質問攻めにあって平気な奴を俺は見えて見てーよ！」

「いるぜ、一人」

「佐久間だろ」

俺は分かっていた。佐久間はクラスの中でも人気者だ。

「アイツはすげーよ。勉強もスポーツも何もかもが出来る」

「ついでにピアノ、料理もお手のものだ」

「まあ、唯一苦手なのは、女子だけだな」

そんな感じで話していると、先生が入ってきた。ちなみに一時間目は数学だ。

「ほーら席に着けー。つっても今日は自習なんだけどな」

クラスからは喜びの声があがった。確かに、自習つっても先生から課題を出されたのは一度もないからな。

「それじゃあ、席に戻るわ」

「ああ」

そして、一日が始まった・・・。

~~~~~授業が終わり、今は帰り道。お嬢様と一緒に帰っていると、

「きゃあああああああああ!!!!!!」

隣の屋敷から悲鳴が聞こえた。

「なんだ!」

俺はすぐに悲鳴の聞こえた屋敷の二階に向かった。

「どうしました!何があつたんですか?」

「あつ・・・ああ・・・」

その女性は目の前を指差した。そこには、

「な！・・・」

一人の男が椅子に座って死んでいた。机の上にはワインのボトルと小さな小瓶、そして床にはワインがこぼれたグラスがあった。

「早く警察と救急車を！」

「は、はい！」

お嬢様がそう叫ぶと女性はすぐに警察を呼んだ。

「朱雀、あなたはすぐに帰りなさい！」

「お嬢様？」

「私がお嬢様つてばれちゃいけない理由があるの！早く！」

「か、かしこまりました」

俺はすぐに屋敷から出た。それから10分後、すぐに警察が到着した。

「・・・」
「しかし驚きました。お嬢様が刑事だったなんて」

「まあね・・・ってあなた何で知ってるの！」

おっと、口を滑らせてしまった。今度から気をつけないと。

「実を言つと今日、お嬢様を見守らせていただきました」

「そんなことしたら見つかるわよ！」

「申し訳ありません。今度から気をつけます」

夏希はため息をついた。

「はあー。やっぱり自殺なのかなー」

「と、言いますと」

「あなたも見たかもしれないけど、あの小さな小瓶は青酸カリだったわ。おそらく自殺するために使ったのかもね。朱雀、あなた何かわかる？」

俺は少し黙り込んで、

「い、いえ私にはさっぱり・・・」

『そうよね。刑事が一般人に質問してもね・・・』

夏希がそう思っていると、

「しかし、お嬢様は今日何人かから証言を聞いているはずですよ。その内容を詳しく話していただければ私^{わたくし}なりの考えが述べられるはずです」

すると夏希は少し考えた後、

「分かったわ。話してあげる」

「ありがたき幸せ」

「………まず死亡した男は、若林 辰夫^{たつお} 62歳。第一発見者はあの家の家政婦よ。なかなか起きないから部屋に呼びにいったら寝室であの状態だったわけ。」

で、ここで私の上司、風祭警部が、

「見ろ、池沢君。若林 辰夫は寝る前にワインを飲んでいたのだ」

で、誰でもわかるようなことを言ったんだけど、

「あのお嬢様、この風祭警部とゆう人はアホでらっしゃいますか？」

「まあ、そう考えて良いわ。」

で、その後若林家の人間が集められたんだけど、そこで辰夫の弟、若林 輝男^{てるお}は、

「刑事さん、ひょっとして兄は自殺したのではありませんか？」

「いえ、まだ自殺と決まったわけではありません」

で、さらに長男の若林 圭一^{けいいち}は、

「自殺じゃないというのなら、刑事さんはこれは殺人だというんですか」

「べつに殺人であるとはいっておりません。まだ殺人の可能性も否定できないといっているだけでして」

そして今度は圭一の妻である春絵が、

「まあ、刑事さん、なんて物騒なことをいうんです。この家にお義父を憎むものなど一人もいません」

次に次男の若林 修二は続けて、

「刑事さん、親父が死んだのは自殺だよ。みんな知っていることだ。そうだろ」

「と、いいますと」

「昨日、家族会議で親父は家政婦である藤代 雅美まこみとの再婚を考えていたのです」

「それで、皆さんの反応は」

「もちろん、反対ですよ。父は騙されているんです、あの女に。きっと財産目当てに違いありません」

すると輝男は胸ポケットからマッチを取り出し、パイプに火を付けた。

「それで結婚を反対された辰夫さんの様子は」

「そりゃあ、すごい落胆した顔で部屋を出て行きましたよ」

「しかし、僕らは父の為に善かれと思って言っただけですから」

今度は圭一が煙草を一本くわえて、百円ライターで火を点けようとしたんだけど、どうやらガス欠みたいで、壁際にいた修二に、

「おい、お前ジッポー持ってたよな。貸してくれ」

やれやれと修二は言いながら、ポケットからジッポーのオイルライターを取り出し、圭一の煙草に火を点けてやると、ついでに自分の煙草にも火を点けた。

「どうやら若林家は喫煙率が高い家族のようですね」

「ええ。私もたまらず窓を全開にしたわ」

そして次の瞬間、扉から家政婦の藤代 雅美が入ってきて、

「旦那様は自殺などではありません！旦那様は何者かに殺されたのです！」

すると春絵は、

「あなた！でしゃばるのも、いい加減にきなさい！お義父様は自殺なさったのよ。それもあなたのせいだね！」

すると春絵は続けて、

「ええ。判ったわ。あなたはお義父様の遺産狙いでこの家に来て遺産をかすめ取ろうとしているのでしょー！」

「いえ！私はそんな・・・」

「黙りなさい！この恩知らずの雌豚め！」

すると、風祭警部は時計を見て、

「おっと、もうこんな時間だ」

時計を見ると、時刻は1時45分、昼ドラはおしまいだと言いたいのだろ。もう少し見たかったが仕方がない。

「で、朱雀。あなたこの時どこにいたの？」

「はい。辰夫氏の部屋の棚においてあった見事な蔵書ぞうしに目を奪われておりました」

「ちょっと！ちゃんと仕事しなさい！」

「なんと、私が愛読してやまない『ハーポツ』の最新版があったのでございます」

「無視すんな！てゆうか人んちのものを勝手に取ってくるな！」

「もちろん返しますとも。読み終えたらですがってあつ！」

朱雀の手から本が取り上げられ、

「今すぐ返す！」

「・・・はい」

その後も捜査が続いた。で、場所は変わり辰夫さんが一昨日行ったスナックに聞きに行ったんだけど、

「ええ。来ましたよ」

「どんな様子でした？」

「うーん・・・なんか陽気な感じだったわ」

「はあ・・・」

「あつ！でもカラオケで十八番を歌おうとしたら急に泣き出して」

「急に・・・ですか・・・」

その後、私達はスナックの手伝いをしたの。

「あのー何を作ってるんですか？」

「ん？ああ。最近、経費削減の為にからしをチューブから練りからしに変えたのよ。でも大変なのよね」

「は、はあ・・・」

その後、向かいに住んでいる少年の話によると、

「君が雄太君だね。話があると聞いてきたんだけど」

「うん。あのね、おじいちゃん先生の部屋から明かりが見えたんだ」

「それは何時くらいのことかな？」

「真夜中だよ。午前2時ごろ」

少年は指を2本立てて答えた。

「雷の音で目が覚めてトイレに行こうとしたらおじいちゃん先生の部屋から小さな明かりがゆらゆらーって動いてたんだ」

「少年よそればどんな明かりだった？マツチか？ろうそく蝋燭か？」

「そこまでは見えなかったよ」

まあ、この少年の証言は事件にあまり役立たなかったわ。

「………」
「どう？朱雀。やはり若林 辰夫は自殺つてことで問題ないでしょ」

しかし、俺は険しい顔をしていた。

「いいえ………。それは大問題でございます。お嬢様」

「え？」

「お嬢様、これは殺人でございます」

「え！」

「失礼ながらお嬢様、お嬢様はどのあたりに毒があったと思いましたが？」

「えっと……。グラスに塗られていたとかは」
俺は首を横に振り、

「いいえ、こちらをご覧ください。これは磨いたグラスでございます。このとき指でふれた場合」

そして触れてみると、指紋がくつきりつついた。

「あ！」

「このように、何らかのものが触れたときに必ず何らかの痕跡は残るはずなのです。しかし、それがなかった。つまり、考えられる事は1つ。ボトルの中に毒を入れたのでございます」

「どうゆうこと？」

「こちらをご覧ください」

俺は黒野に1本のワインボトルを取り出させた。

「これは？」

「イーヨー ドーの1995円でございます」

「ホントだ。値札が貼ってある」

夏希はボトルをジーツと見た。

「ねえ、朱雀。これ、どっから見ても毒を入れるところなんてどこにも無いわよ」

俺は「あー・・・」と言い、その後黒野と顔を見合わせ、

「あの・・・失礼ながらお嬢様」

俺は顔をズイツと近づけると、

「お嬢様の目は節穴でございますか？」

「……ハア？」

夏希の持っていたコップに亀裂が入った。

「あの……お怒りのようでしたらお詫びを……」

「謝ってすむならこんな態度しないわよ！」

夏希は朱雀と黒野に怒鳴りつけた。

「それじゃあ聞くけど、あなたこの事件の真相がわかると言っの？」

「いきなり話が変わりましたね……。まあ、この事件はそれほど難しいものではございませんが、しかし……」

「何よ」

「今ここで犯人を言ってもお嬢様にはご理解いただけないかと……」

「……」

夏希は一瞬、拳を振り上げそうになったが必死にその手を降ろし、

「朱雀、私にも分かるように説明して」

その顔はいかにも屈辱に溢れていた。

「……かしこまりました。お嬢様」

すると料理を出しながら、

「しかし、まだ夕食の続きでございます」

目の前に料理を出すと、

「謎解きはディナーの後にいたしましょう」

殺しのワインはいかがですか？（1）（後書き）

最後まで読んでくれた方お疲れ様でした。

次も頑張ります。（^ - ^）o

殺しのワインはいかがですか？(2)(前書き)

第6話

今回グダグダです。

殺しのワインはいかがですか？（２）

夕食は終わり俺、黒野、お嬢様は大広間にいた。

「では話の続きをいたします。まず、犯人はどうやってワインボトルのラベルをはがさずに青酸カリを入れたのか。それは簡単でございます」

俺はもう一度ボトルの口を見せた。

「よくご覧ください。ここに小さな穴が二つ空いているのが見えますでしょうか？」

「え！」

夏希はもう一度ボトルの口を見た。確かにラベルの頭に小さな穴が二つ空いているのが見える。

「これは？」

「恐らくワインの熟成を促すための空気穴でございます。ワインボトルを見慣れていないお嬢様が分からないのも無理はありません」

「ふん！どうせ私の目は節穴ですよ！」

どうやら夏希はまだあの言葉を引きずっているらしい。

「で、その穴から注射針かなんかで毒を入れたってことね」

「さすがはお嬢様、ご理解がお早い。おそらく、辰夫氏が外出している間に部屋へ侵入し、毒入りワインボトルとメッセージカードらしきものを置いていったのでございます」

「メッセージカード？」

「これに関しては後ほど説明させていただきます」

そして俺は続けて、

「まず、お嬢様は辰夫氏が自殺したとお考えのご様子。しかし私はそうは思いません」

「どうして？だって辰夫さんは涙を流すほど思い悩んでいたのよ」

「それは勘違いでございます。スナックのママはからしを練りからしに変えたと言っていました。そこに涙の原因があつたのです」

「え？」

俺は二つの皿を持ってきた。

「こちらに市販のチューブのからしと練りからしをご様子しました。ご賞味ください」

夏希はまず、チューブのからしをスプーンに取り食べ、苦い顔をしながらも練りからしを食べた。すると、

「！こっち辛っ！」

「はい。練りたてのからしは涙がちょちょぎれるほど辛いものなのでございます」

「先に言つてよ」

夏希は涙目で言った。

「つまり、辰夫氏の涙の原因は精神的苦痛ではなく、人間の反射運動によるものだと思われます」

「なるほどね」

「そして次に注目すべき点は雄太少年の証言にあります。少年は辰夫氏の部屋から小さな明かりが見えたと言っていました」

「でもあの証言はあまり役立たないわ」

「いいえ、お嬢様。これは重要な証言でございます。まず、私が辰夫氏の部屋にいたとき入り口の脇の棚に懐中電灯が置いてありました。なのになぜ、火を灯したのでしょうか？」

「えっと……。停電だったから？」

「確かにそれもございます。しかし、若林家の人間はあそこに懐中電灯があったことを誰もが知っているはずです。つまり、部屋にいたのは懐中電灯が無くて困らなかつた人物に絞られます」

「そつか。それじゃあ、犯人は手元にライターやマッチを持っていたあの喫煙者達に絞られる」

「作用でございます。しかし、マッチの明かりでは作業には不十分でございます。作業中、何本もマッチを擦らなくてはなりません」

「てことはマッチを使っていた輝男は犯人ではないわね」

「はい。さらに圭一の妻、春絵も犯人ではございません」

「どうして？」

「彼女は喫煙者ではないからです。あの時圭一はライターのがスが切れたとき、隣に座っていた春絵ではなく、修二から借りた。すなわち、春絵は火を点ける物がなかったとゆうことになります。そしてさらに普通の100円ライターではボタンをずっと押し続けなければ火は消えてしまいます」

「てことは、圭一も除外されて、犯人は修二ってことね！」

お嬢様は自信ありげに話したが俺は、

「まあ、半分当たっていて、半分間違っているといって良いでしょう」

「え？どうゆうこと？」

「ここで先ほど話したメッセージジカードについて話しましょう。恐らく犯人は辰夫氏に毒入りワインを確実に飲ませるためにメッセージカードを使ったと思われます」

「え？」

「お嬢様、昨日はどのような天気だったかご存じでしたか？」

「えっと・・・確か雷と雨が降っていたわ。でもそれが何か？」

「雄太少年の証言によると、辰夫氏はいつも窓を開けていました。」

そして、藤代 雅美さんの証言によると寝る前に本を読んでいたと言っていました。しかし、あの時機の上には本など一冊もありませんでした」

「確かに無かったわ」

「そして、私は本棚を見て、一つ疑問に思ったことがありました」

「疑問に思ったこと？」

夏希は首をかしげた。

「はい。それは一冊だけ逆さまだったことです。10冊や15冊ならまだしも、一冊だけ逆さまなのは少し違和感がございます」

「確かに。でもどうして？」

「犯人が暗闇のなか作業していてうっかり間違えたのでございましょう。恐らくその中に・・・」

「メッセージカードがあるってわけね。でも一つ分からないのは動機よ」

「遺産争いでございましょう。恐らく辰夫氏は藤代 雅美さんとの結婚を押し切るつもりだった。このままでは遺産が減ると考えた犯人は辰夫氏を殺害した」

「お金のために大切な家族を殺す？ 私には想像もつかないわ」

俺は眉間にシワを寄せた。

「お嬢様にはご理解出来ないかもしれませんが。しかし、人は数千万・・・いえ、わずか数百、数十万でも殺意を抱くものなのでございま

「ちょっと、何なんですかあなたたち！」

若林家の人達も集まってきた。

俺は本棚にある逆さまの本を見つけ出した。

『これだ』

その本ねページをパラパラとめくっていくと、封筒のような物が挟まっていた。そこには藤代 雅美以外の家族のメッセージが書かれたメッセージカードだった。

「ここに書かれたことはどれも本心ではございません」

「どうゆうこと？」

「家族全員が共犯者とゆうことです。家族で相談し、辰夫氏を殺害したのでしょう」

「どうして・・・どうしてですか！」

雅美さんは叫んだ。

「うるさい！お前が俺達の金を・・・」

「いいえ、それは違います。辰夫氏は藤代 雅美さんを新たな家族として加えたかっただけでございます」

「なに？」

「あちらでございます」

俺はワインが並んでいる棚を指差した。

「あのワインは圭一さん、輝男さん、修二さん、春絵さんの生まれた年のワインでございます。そして、この鍵の番号は109。亡くなった奥様の誕生日でございます」

そのとき家族の全員がハツとした。

「やはり辰夫氏は亡くなった奥様のことを忘れずに覚えていたのでございます。彼はこの中に雅美さんという新たな家族を入れたかった。ただ、それだけだったのです」

その後、警察が来て四人を連れていった。

「分かってたの？家族が共犯者だって」

「はい。家族の証言は辰夫氏は落胆した顔で出て行ったと言っていました。しかし、スナックのママは辰夫氏は陽気だったと言っていました。つまり、家族全員が口裏をあわせていたということ。本当は結婚に賛成していたのでしょうか」

夏希は複雑な顔をしながら、

「そんな矢先に家族によって殺される。辰夫さんどんな気分だったか」

俺達は黙りながら寮に戻っていった・・・。

殺しのワインはいかがですか？(2)(後書き)

今回はあまり良い出来ではありませんでした。
次回頑張ります。(^-^)

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（前書き）

第7話

今回は短めにしました。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？

5月

春が少し終わりに近ずき、桜が葉桜に変わる頃。教室ではあることが話し合われていた。

「そんじゃあ、玉入れの選手が決まって次は騎馬戦の大将なんだが・・・。誰がやる？」

そう、話し合われていたのは二週間後に開催される体育祭のことだ。俺は綱引き、棒倒し、リレーにでることになっている。

そして今は、体育祭の目玉である騎馬戦の話し合いをしていて、誰が大将をやるのかを話し合っている。

「で、事前に候補のアンケートをやったんだが、候補になったのは朱雀、お前だ」

「え！俺！なんで！」

「そりゃあ、この前の持田先輩との対決を見れば・・・なあ」

なあじゃねえよ！なあじゃ！

「普通の騎馬戦ならまだしも去年の体育祭の騎馬戦。ビデオで見たけど、ありゃあ戦争だぞ！戦争！」

「え？それが騎馬戦じゃないのか？」

おい実行委員。あんたビデオ見てたのか？あんた見てないからそん

なセリフをサラツと言えるんだよ！

「で、どうするんだ？」

うつ……。みんなの目がこの上ないほど輝いている。「いけ！朱雀！」とか、「お前はヒーローだ！」とか、「もっと熱くなれよ！」とかいう気持ちが痛いほど伝わってくる。

『ここは……。やるしかないのか？どうする……。どうするアル』

そして迷った末、

「……。分かったよ。やってやる」

その瞬間、クラス全員の歓声が湧いた。

「あー。喜んでいるところ悪いんだが、俺の騎馬は誰がやるんだ？」

その瞬間全員が石ように固まった。

てか、それ頭に入れてなかったの？みんな？

そんな中一人が手を挙げた。

「んじゃあ俺がやるよ」

「！山本！」

「こんくらいはやんねーとな。で、後は誰がやる？」

そしてそれから10分後、ようやく騎馬が決まった。

「よし！体育祭まであと二週間。張り切ってこーぜ！」

俺は一息入れて、

「さて、いよいよこれから体育祭に乗り込むわけだが、これだけは忘れんな。・・・何が起ころうと、楽しんでこーぜ!」

俺は大きく息を吸って、

「いぞぞ！」

「才才才才才才才才才才！！！！！！！！！！」

そして運命の体育祭が始まった・・・。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（後書き）

戦争みたいな騎馬戦ってどんな感じでしょうねWWW
想像しただけで恐ろしい。

捕らわれた親友（前書き）

第8話

またまた長くなって、最多ページ数を更新しました（・|・；）

捕らわれた親友

体育祭も始まり、今は種目も終わり次の種目の準備をしている。

「まず、一つ目は快勝だな」

「ああ。結構楽に勝てたな」

ちなみに第一種目は玉入れで山本の活躍により快勝した。

「それにしても山本には救わせたよ」

「何言ってるんだよ。お前だってバンバン入れてたじゃないか」

「お前程じゃねーよ。だがしかし、佐久間のクラスとE組はやバかったな」

「ああ。ありゃあ強敵だ」

E組というのはあまり詳しいことは知らないが、スポーツ推薦で入ってきた奴が偶然固まったクラスである。

しかもそのクラスにもAランクオーバーの守護者がいるらしい。

「なあ山本」

「E組のAランクオーバーの奴のことだろ」

「たく。こいつは読心術でも取得してんのか？」

「ああ。知ってんのか？」

「いや。名前くらいしか聞いてない」

「名前は？」

「上茂 かみしげりょうすけ 涼介属性は分からないけどな」

「そうか・・・」

すると、アナウンスの声が聞こえた。

『それでは次の種目、100メートル走に出場する選手は準備してください』

「おっ！確かこの種目は佐久間が出るんだっけ？」

「まあ結果は分かってるけどな」

そこで入場門に行ってみると、やはり佐久間がいた。

「おーい佐久間ー」

「なんだお前か」

「なんだって何だよ。応援しに来たのに」

「いらねーよ。んなもの」

「そー言うなって。頑張れよ」「ああ。一位になってくる」

そう言いながら佐久間は会場に向かった。

「・・・・・・・・・・」

「どうした？朱雀」

「ん？ああ、ちょっと懐かしいなって。中学のころが」

「中学のころ？」

「ああ。アイツのことこんな感じで見送ったな〜って」

「へー。お前、友人いたんだ」

「悪かったないないように見えて」

「ハハッ。わりーわりー冗談だつて」

「ったく・・・」

俺は空を仰ぎながらあの日を懐かしんでいた・・・。

「・・・・・・・・・・」
「おい。孝平」

「ん？」

そこで振り向いたのは男子生徒。如月きさらぎ 孝平こうへいは朱雀を見つけ、

「おー朱雀。お前もこの種目に出んのか？」

「いや、俺は出ねーからお前の応援」

「そーか。つつても応援はいらねーよ」

「んなこと言うなって。とゆうわけで頑張れよ」
朱雀は手を前に出した。

「ああ。一位になって帰ってくるよ」

『それでは入場してください』

孝平は朱雀とハイタッチを交わし、入場していった・・・。

「・・・」 時は過ぎ、今は昼休み。みんなそれぞれ弁当を食べている。

ちなみに俺は山本、佐久間と一緒に食っている。さすがにお嬢様と食べるのは周りからの目を感じるので事前に弁当を作っておいて渡しておいた。

「えーと、今トップのクラスは・・・E組か」

「つつてもほとんど差は無いけどな」

「まだ逆転可能の範囲だ」

「次なんだっけ？」

俺はパンフレットに目を通した。

「次は・・・フォークダンスだな」

「フォークダンス！？これまた面倒なヤツが来たな」

「まあまあ、そう言わずにやればすむ話だ」

佐久間はため息をつきながら会場に行った。

「さて、俺達も行くか」

「そうだな」

俺は重い腰を上げた。すると携帯が鳴った。

「ああ、悪い山本。先に行つててくれ」

「オツケー」

俺は携帯を耳に当てた。

「もしもし」

「高峰 朱雀か？」

その声は明らかに人の声ではなかった。変声機で声を変えているとしか思えない。

「誰だお前」

「フッフ……。私はIT。クロケツサファミリーの者だ」

「いったい何の用だ？」

「お前のリングをいただきたい」

「ボンゴリングのことが」

「作用」

「・・・断る」

「ならば仕方がない。無理矢理でも奪いに行きましょう」

「何？」

すると一人の男子生徒が叫んだ。

「なっ！なんだあれ！」

振り向いた視線の先には、何かこっちに向かってくる物体が見えた。それは車でもバイクでもないものだった。

「あれは・・・ジェット機！？」

そのジェット機から降りてきたのは三人の女達だった。恐らく真ん中にいるのがＩＴで両端の女どもが部下だろう。

「お前がＩＴか」

「そうだ。そしてコイツらが私の仲間、EQとNWだ」

これは本名ではなくコードネームだな・・・。
これじゃあどこの誰だか・・・。

「もう一度言う。ボンゴリングをいただきに来た。さあ、リングを渡せ！」

すると、観衆の中から、

「何がなんだか知らねーけど」

「このリングは渡すわけにはいかねーなあ」

「山本！佐久間！」

「ほう。他にもリング所持者がいたか」

「とゆうわけで、派手な登場の後すまないが帰ってくんねーか」

「体育祭の続きがあるからな」

するとITは、

「そうか……。お前コイツがどうなってもいいようだな」

「どうゆう意味だ？」

「これを見る」

ITは校舎にあるものを映し出した。

『！コ……コイツは……』

「孝平！」

「そう、貴様の友人如月 孝平だ。コイツには時限爆弾をセットしてある。あと30分もすればドカンさ」

「そんな・・・」

「コイツを救いたければ、リングを渡せ！」

「くっ・・・卑怯な・・・」

そのとき、俺は迷っていた。

『クソッ！どうする・・・渡さなければ孝平は・・・だが渡したとしても殺す可能性が・・・』

すると、モニターから、

「す・・・ざく・・・」

！！！！

その声の主は孝平だった。

「孝平！」

「チッ、起きちまったか」

「ダメ・・・だ・・・絶対に・・・その・・・リングを・・・渡し
ては・・・ならない」

「だがそれではお前が！」

「朱雀・・・お前が・・・ファミリーを・・・守れ・・・そ
の・・・ボンゴレ・・・リングで・・・」

「孝平……」

「俺の……ことは……気にすんな……そのリングさえ……守れば……それでいい」

「ふん。忌々（いまいま）しい。親友を殺してほしくなければリングを渡せ！」

俺は少し黙った後、

「……山本、佐久間。頼みがある」

「何だ？」

「孝平を探し出して時限爆弾を止めてくれ」

「朱雀……やめろ……」

「悪い孝平……お前の言うこと……聞けねーわ。だってよ、目の前で親友が殺されるの黙って見過ごすわけにはいかねーんだ。もし、そんな事したら……俺は一生後悔する。だから俺は……」

俺はＩＴを指差し、

「コイツをブッ倒して、お前を救い出す……！」

山本は笑みを浮かべ、

「まっ、お前らしいな」

「まっ、たくだ」

二人は納得したように言った。

「頼んだぞ二人とも」

「ああ」

「りょーかい」

二人は校門へと去っていった。
それを見送った俺は、

「んじゃあ先生みんなを校庭から避難させてください」

「わ・・・分かった」

先生も動き出し、生徒を校舎に避難させ、一部が雷の炎で結界を張った。

「朱雀君。本当に大丈夫なんだな」

「大丈夫ですよ。綱吉さん。もしもの時だけお願いします」

「・・・分かった。だが、もしもの時は加勢するからな」

そういつて綱吉さんは戻ろうとした、

「あっそつだ懐中時計、上手く使えよ」

そういつて戻っていった。

「何を話したか知らないが、どんなにあがいても私達には勝てない

ぞ」

「そんなの闘ってみなきゃわかんねーぜ」

「朱雀……どうして……いじまで……」

「孝平・・・一つ言わせてくれ。俺は親友の為ならなんだってできると思つてた。けど、こんな頼みを聞くくらいなら、俺はお前となんか友達になつてねーよ。だから・・・俺は絶対、お前を救つてみせる！そのためには俺はコイツに勝ちたいんだ」

すると、俺のポケットから光を放った。

「……これは！あの時貰った懐中時計！」

「ぐっ……なんだ!？」

結界の内側で綱吉は笑みを浮かべていた。

「そう、それがお前の武器だ。ここからどうするかはお前の答え次第だ」

するとその光はさらに強くなり、

くっ……ダメだ。目を開けられな……

く・く・く・く・く・く・く　目を開けるとそこは青空が広がっていた。

「いじい・・・・は・・・・」

「待っていたぞ」

!!!!

振り返るとそこには歴代のボンゴレボス達がいた。そこにはボンゴレの創設者ボンゴレ一世もいた。

「何これ・・・夢？幻覚？」

『E' la nostra incisa sulla
neilo (リングに刻まれし我らの時間)』
「刻まれし・・・時間？」

「お前はこの力を受け継ぐ覚悟はあるか」

「え・・・」

「お前はこの力をどう使いたい」

「どうって・・・それはもちろん・・・」

俺は心の底から思っていること口にした。

「みんなを守るために使いたい。大切な人や仲間、友達を守るために！」

「その仲間のためにすべてを賭けられるか」

「え・・・」

「すべてを投げ出してまで助け出す覚悟が・・・」

俺は少し黙った後、

「・・・はい」

するとI世は、

「良い顔だ。その覚悟しかと受け取った。この力で栄えるも滅びるも好きにせよ、ボンゴレXウンディチエーズイモI世」

!!!!

「お前を待っていた・・・さあ、行け！」

~~~~~その頃校舎内では、

「お、おい何だよあれ・・・」

「わかんねー。朱雀が光に包まれてるとしか・・・」

それを見ながら夏希は心配そうにしていた。

『朱雀・・・』

~~~~~その頃IT、EQ、NWはまだ警戒している様子だった。しかし、そろそろしびれを切らした様子である。光に向けて銃口を向けよいとした、その時

「？待て」

ITは光の中から微かだが何かが見える。すると、その中から

「昔、親父にこんな事を言われた。『やりたいことをやれ！そうすればいつか自分のやるべきことと合わさり世界の声が聞こえる』って。今がそうなのかな」

俺は口元に笑みを浮かべた後、

「さあ、派手に行こーか！一緒にこの世界を変えよーぜ！」

一気に光は強風ともに弾け、辺りに強い風が吹き荒れた。

「自分の答えを出したか……。やはり、アイツの武器は俺達と同じ……」

そこには額に炎を灯し手の甲にはボンゴレの紋章を宿したグローブをはめた朱雀がいた。

「グローブ使いだ！」

俺は拳を握り直し、

「さあ、始めようか！」

捕らわれた親友（後書き）

いやー。迷った末、やっぱりツナとジヨットと同じグローブ使いになっちゃいました。

今度から色々な工夫を凝らして頑張ります。o(^-^)o

天空鷹（ファルコデイチエーリ）（前書き）

第9話

更新が少し遅れました。すみませんm（――）m

久しぶりの戦闘描写です！ご覧ください！

「あつちだ！」

そこは椅子に鎖で縛られた孝平がいた。お腹には時限爆弾が巻かれている。

「お前らは・・・確か・・・朱雀の・・・」

「あまりしゃべるな。今助けてやる」

しかし、ここで佐久間が『あるもの』に気づく。

「こ・・・これは！」

「どうした？」

「パスワードだ・・・」

そうそこには一台のノートパソコンがあり、画面には四桁のパスワードがあった。

「残り時間は！」

「あと20分だ！」

「どこまでいけるか・・・だな」

二人は暗号解読に取りかかった・・・。

「・・・」
「ハア・・・ハア・・・」

IT達との戦闘が始まってすでに10分が経過していた。
あれから朱雀も山本達が時限爆弾のパスワード解析に手を焼いてい

るのはモニターを通して伝わっていた。

『クソッ・・・4桁のパスワードっても全部数字って言うほどコイツらはバカじゃねえし、どうする・・・』

これほど朱雀が手こずっている理由は奴ら戦い方にあつた。

三人なだけあつて連携が良く、うかつに突っ込めば確実にやられる。

「それにしても、アイツらの銃はいつ弾切れになるんだ・・・」

そう、普通の銃ならば一丁の弾数は12〜13発程度、なのにアイツらは12発おろか、30は撃っているように見える。見た目は普通の銃なのに・・・。マガジンを入れ替えた仕草も見当たらない。

『クソッ！どうなっていやがる！』

そう思っていると、ET達は容赦なく撃ってきた。俺は炎でシールドをつくり防御した。

その時あることに気づいた。

「これは・・・」

そこで俺はある一つの仮説が浮かんだ。

『・・・賭けてみるか』

俺はマイクで綱吉さんを呼んだ。

「綱吉さん。一つ頼んでもいいですか？」

「何だ？」

「それは・・・」

俺は内容をすべて話した。

「分かった。やってみよう」

「お願いします」

銃撃が止むと同時に俺は突っ込んだ。IT達も怯むことなく撃ち続けた。俺は炎のシールドを広げながら接近した。俺は懷に潜り込んだ。

「クツ！なめるなあああ！！！！」

銃口は俺の額に向けられた。しかし、そこが俺の考えた作戦だった。すでに超死ぬ気モードになり後ろにまわっていた綱吉さんが銃をつかみ、

「ファースト零地点突破初代エディション！」

すると、IT達の持っていた銃が全て氷付けにされた。

「やっぱりな。あの銃弾は全部、死ぬ気の炎で出来てたんだ」

「・・・どこで気づいた？」

「さっきガードしてた時、妙な事に普通の銃弾なら炎シールドによって溶かされて溶けた跡が少しでも残るはずだった。しかし、それがなかった。つまり、死ぬ気の炎をぶっ放していたということになる」

「フンッ・・・なるほどな・・・」

「何故こんな事をした？お前の仲間がもしこんな目に遭ったら黙ってられないだろう？」

「仲間？・・・フフフッ・・・フハハハハハハハハハハ！！！！！！」

「何がおかしい？」

「仲間？笑わせてくれる！コイツ等なかなか私の手駒にすぎないんだよ！」

「なん・・・だと・・・」

「こんな奴らなんか死んだって困らねーんだよ！」

「お前・・・」

「それよりいいのかなあ？もう時間がないぞ！！！！」

モニターにはパスワード解析に苦戦している佐久間と山本が映っていた。

「朱雀・・・ダメだ！全く解けねー！」

「あと一分だ！」
すると孝平が、

「二人とも・・・逃げる・・・。もう・・・間に合わない・・・。」

「まだだ！まだあと一分残ってる！」

「そうだ！絶対に救ってやる！お前と朱雀の友情のために！」

「佐久間・・・山本・・・。」

しかし、時間は無情にも過ぎていく・・・。
そして・・・遂に・・・、

「3・・・2・・・1・・・。」

カチッ・・・。

く・・・く・・・く・・・その時、俺の中で時間が止まったように思えた。

頭の中が真っ白になった。

「あれ？・・・爆発・・・しない」

モニターの佐久間の声で俺は我に返った。
校舎内からはどよめきが聞こえた。

「おい・・・どうということだよあれ」

「まさか・・・。」

綱吉さんはモニターを見ながら、

「朱雀・・・」

「どうしてお前の仲間は今までお前についてきたと思う？それはお前が大切だからだろ。お前に忠誠を誓って、お前を信じてついてきたんだろ？」

「アイツ・・・」

「そんな奴らの忠誠心踏みにじって、死んでも困らねーとか言ってお前何なんだよ！ファミリーだろ！お前の“家族”だろ！」

「朱雀・・・」

「お前だけは・・・お前だけは死んでも許さねえ！！！」

すると、グローブが急に輝きだした。

「クツ！・・・何だ！」

「来たか・・・」

「え？・・・」

輝きが止むとそこには形状が変わったグローブがはめられていた。

「これは・・・」

「そう、それこそがお前の真の武器。『XⅠグローブ』だ！」

「これが・・・俺の真の武器・・・」

俺はグローブに炎を灯した。すると今までに無い力が溢れ出てきた。

『すごい……。心の底から力が溢れ出てくる。それに、今までよりしっくりする!』

「さあ、決めてこい!ボンゴレXⅠ世!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!」

俺は速攻で突っ込み、奴の懐にもう一度潜り込んだ。

ⅠTも抵抗しようとしたが、時すでに遅し。俺は拳を握り締め思い切り腹に一撃を入れた。

奴の身体はくの字に曲がりそのまま吹っ飛んでいった。飛んでいった先では既に戦闘不能になったⅠTの姿があった。

「勝った……」

「勝った……」

「かつ……た……」

「「「「わあああああああああああああああ!!!
!!!!!!」」」」

校舎内から割れんばかりの歓声が巻き起こった。

俺は空を仰いで、

「終わっ……た……」

バタツ……。

「おい朱雀君！」

「朱雀！」

俺はその場に倒れ込んだ・・・。

その後の事は俺は覚えていない。

しかし、孝平も山本達も無事で、俺は死んだように病院のベッドで寝ていたそうだった・・・。

天空鷹（ファルコディチェーリ）（後書き）

戦闘中に武器のバージョンアップ・・・。なんかすごい事しちゃいました・・・。

終わりとそれから（前書き）

第10話

更新が少し空きました。すみませんm（
—
—
）m
どうぞご覧ください。

終わりとそれから

目を覚ますと俺は病院のベッドにいた。

そこには佐久間、山本、黒野、綱吉さんがいた。

「お！目覚めたか」

「・・・ここは？」

「病院だよ。あの後、お前は倒れて運ばれたんだ」

「そう・・・ですか・・・」

すると俺は思い出したかのように、

「そうだ！クロケッサファミリーの奴らは！イッテッ！」

「おいおい、無茶すんな。安心しろ。ボンゴレの人達が連行していったよ」

「みんなは！」

「問題ないわよ」

入り口には夏希お嬢様がいた。

「お嬢・・・夏希さん・・・」

「お嬢様で良いわよ。みんな知ってるし」

「そうですか……」

「で、みんなのことだけど、職員の人達と上茂君のおかげでみんな無事よ。孝平君もあばら骨数本折る程度で命に別状は無いって」

「そうですか……。良かった……」

そこに一人の男子生徒が入って来た。

「……お前が上茂 涼介か……」

「ああ」

「おそらく属性は……雷だろう」

「よく分かったね」

「まああの中にいたのは雷属性の人だけだったからな。ただし、普通のランクの炎ではまず破られる。つまり、ランク上位のBとA才バーに絞られる。ただし、あの中に生徒はお前だけだった」

「素晴らしい推理力だ。驚いたよ。さすがは少ない証言の中、若林 辰夫を殺人した犯人を割り出しただけはあるね」

「何故それを？」

「風の噂かな」

そこに綱吉さんが割って入って、

「ハア……。まあいい。それより涼介、お前はその……ボンゴ

レ・・・なのか？」

「はい」

「ふう、ならよかった」

「何故ですか？」

「あれほどの防御壁を造れる程の純度の高い炎はランボ以来見てないからな。他の奴らにやるなんて勿体無い」

『確かに、あれほどの防御壁を造れるならうちの守りの要になるかなめ』

「まあ何にせよよろしくな涼介」

「ああ、こちらこそ！」

こうして新たな仲間、雷の守護者、上茂　涼介が加わった。

「・・・・・・」医者が来て後二日すれば退院出来ると話を聞いた時はみんな安心しきった顔でいた。

その後みんなは孝平の方を見てくると言って綱吉さん以外は部屋を後にした。

「あの中でよく気がついたな。銃弾が全部死ぬ気の炎だったのに」

「そう言うつといて綱吉さんとはとくに気づいていましたよね」

「あつ・・・バレてた？」

「はい」

「そういえば、朱雀君は孝平君の爆弾が偽物だって気づいてたみたいだね」

「分かってたんですか？」

「まあね。やっぱり超直感で感じたのか？」

「いえ、アイツの目を見て判断しました」

「目？」

「はい。アイツ話している時に視線が右上を向いたんです。あれは、人が嘘をつくときに起こる仕草のうちの一つなんです（本当）」

「しかしそれだけでは・・・」

「ええ。確かにそれだけでは判断は難しいです。しかし、最後の決め手となったのは、アイツの戦い方でした」

「戦い方？」

「俺と綱吉さんで連携をとった時、実は近くに他の仲間がいたんです。普通、仲間を手駒扱いする奴ならその仲間を盾にしたはずですが、それが無かったということは、仲間を大切に思っていた証拠。人を殺すなんてあり得ません」

「なるほどね・・・」

綱吉さんは少し笑みを浮かべ、

「やっぱり君を選んで良かった」

「え？」

「敵を殺めず、友人、仲間のためならすべてをいとわない。そしてあの時、この力をみんなを守る為に使いたいつて言う答えも本物だ」

「やっぱりあの空間に綱吉さんもいたんですね」

「ああ。I世も言ってたよ『アイツは俺やX世に似ている』って『しかし、歴代のボスの中でも類を見ないタイプだ』って」

「違うタイプ？」

「俺も聞いて驚いたよ。朱雀君、キミには・・・」
綱吉さんは俺の顔を見て、

「キミには大空以外の波動も流れている」

「え!？」

この時、俺は「大空以外の波動」を持っているなんてもちろん知らなかったし、ましてやこの事実により俺の新たな武器が誕生するなんて知るよしも無かった・・・。

終わりとそれから（後書き）

朱雀の新たな可能性が広がりました！

話は変わり、寒いですね。自分はストーブも良いですが、やっぱりオコタに限ります！

クリスマスもしくは年明けくらいに番外編でも出そうかなと思います。要望がありましたら感想に添えてお願いします。

m ((m

晴のち曇り（前書き）

第11話

更新が空いてしまいましたm（――）m
かつ、内容もグダグダです。内容はタイトルでまあ勘のよろしい方は分かると思います。
どうぞご覧ください。

晴のち曇り

クロケツサファミリーとの戦闘から一週間がたち、並盛に再び平穏な日々が帰ってきた。

俺も退院以降、夏希お嬢様の執事として仕事を再開している。いつものようにお嬢様と登校していると。

「ねえ、朱雀。あなた身体は大丈夫なの？」

「ええ。山本の雨ゴテのおかげでだいぶ痛みも和らぎました」

そう俺は退院以降、山本の持っている雨の鎮静の効果を利用し、痛みを軽減している。

「晴の守護者がいればいいんだけどね」

「そうですね」

そんな感じで話していると、

「よっ！朱雀と夏希！」

「山本。おはよ」

「おはよ。山本君」

「良い知らせだ！晴の守護者が見つかった！」

「本当か！」

「ああ、俺の先輩でAランクオーバーの晴の人がいたんだ」

「そっか。んじゃあ昼休みくらいに会いに行こう」

そんな感じで学校に登校していった……。

[illegible]

俺、山本、佐久間、涼介、お嬢様は二年生のフロアにいた。

「なあ、山本。本当にここののか？」

「ああ、そのはずだけど……」

それにしてもすごい視線だ。まあ、あの戦いの後なら当然か……。ハア……。また面倒な事しちゃったなあ。

そんな感じで待っていると、一人の男子生徒がやってきた。

「あつ！先輩遅かったじゃないですか！」

「いやーすまん、すまん。校庭で蛇と格闘していたら長びいてしま
った」

校庭で蛇と格闘！？何やってんのこの人！
すると後ろからお嬢様が出てきて、

「お兄ちゃん！」

「え？」

「え？」

「え？」

「おー夏希！どうした？」

「どうしたじゃないよ！お兄ちゃん晴の守護者だったの？」

「ああ、言ってなかったっけ？」

「言ってない！」

「えーっと・・・お嬢様。まず落ち着いて・・・」

「これが落ち着いていられるかつっの！」

するとお嬢様のお兄さんは俺を見て、

「おー！お前が高峰 朱雀か！噂はかねがね聞いているぞ！」

「え、ああ。どうも」

「無視するなー！」

「俺は池沢 了平^{いけざわ じやうへい}。よろしく！」

「はい。こちらこそ」

俺は握手を交わすと、

「先輩はボクシング部主将で、全国大会で優勝した実績があるんだ」

マジかよ・・・すげえ・・・。

「いいや、俺はまだまだ弱い！誰かを守れなければ本当の強さとは言わない！」

「ちなみに先輩は人生で一度も喧嘩はしたことがないんだ」

へえ・・・。意外だな・・・。

「当たり前だ！この拳は人を傷つける為にあるんじゃない！仲間や自分に迫る困難や逆境を打ち砕く為にある！」

『仲間や自分に迫る困難や・・・逆境・・・それを打ち砕く為にある・・・』

「まさに晴の守護者につってつけだな」

「綱吉さん！」

「ここじゃ場所が悪い。屋上に行こう」

「あ、はい」

く・・・く・・・く・・・屋上・・・

「では、話の続きといこう・・・っと言いたところだが・・・」

???

「おい、早く出てこいよ！」

屋上入り口から出てきたのは、一人の男子生徒だった。その格好は黒ズボンにワイシャツ、ベストを着た感じである。

「群れるのは嫌いなんだけど・・・」

「ハア・・・。相変わらず雲雀さんそっくりだな」

『あれ？あの人は確か風紀委員の・・・』

「えっと紹介しよう。コイツがお前たちの雲の守護者。雲雀ひばりゆづち雄也だ」

「雲の・・・守護者・・・」

「俺はコイツが最も適任だと思う」「何故？」

「さっきの池沢も同じように、晴の守護者の使命に合っている」

「使命？」

「晴の守護者の使命。それは・・・ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で碎き、明るく照らす日輪」

「ファミリーを襲う逆境を・・・」

「自らの肉体で碎き・・・」

「明るく照らす日輪・・・」

「確かに適任ですね・・・」

そう、感傷に浸っていると、

「ねえ、帰っていい？」

「だから待ってなつて。ハア・・・。んで、雲の守護者の使命は・・・」

「何ものにもとらわれことなく独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮き雲」

「なんだ朱雀君、知ってたのか？」

「ええ。まあ」

俺は続けて、

「嵐の使命、それは常に攻撃の核となり休むことのない怒涛の嵐。雨は、戦いを清算し、すべてを洗い流す鎮魂歌レクイエムの雨。雷は、ファミリーへの攻撃を一手に引き受け激しい一撃を秘めた雷撃」

「随分と詳しいな」

「昔、親父に教えてもらったんだ」

「親父さんって高嶺　玄武たかみねけんむか？」

「知ってるんですか？」

「ああ。今でもアイツと色々やりとりしてるよ。とは言ってもアイツは世界中を飛び回っていて何処にいるのか検討もつかないけどな」

「そう・・・ですか」

「安心しろ。アイツはそう簡単に死なないよ！」

「は、はぁ・・・」

「そんなことよりまずは守護者だな」

「残すは霧か・・・」

俺は空を見ながら、

『霧の使命それは・・・無いものを在るものとし在るものを無いものとする事で敵を惑わしファミリーの実体をつかませないまやかしの幻影・・・。となるとやはり術士か・・・それも相当な実力を持つ』

「どっちにしる探すのは難儀だな・・・」

俺は小声で空にそう呟いた・・・。

『だが・・・必ず見つけてやる！』

屋上には心地よい風が吹き抜けていった・・・。

晴のち曇り（後書き）

終盤は守護者の使命について書いていました。

年明けに向けての番外編も頑張って書きたいと思います。

クリスマス企画！幻影のイルミネーション（前書き）

第12話

更新が空いてしまいました。

今回は番外編クリスマスバーションです！（クリスマスが過ぎてしまいましたが・・・m（┐┌）m）

どうぞご覧ください！

クリスマス企画！幻影のイルミネーション

季節は過ぎて冬になった。学校に来る人はみんな揃って首を引つ込めて歩いている。

「なんだかシユールな光景だな」

「ああ。当たり前のような光景だけど」

俺と山本は教室の窓からそんな光景を眺めていた。

「もう、12月か・・・」

「はえゝもんだな」

そんな感じで窓越^{たそがれ}しで黄昏^{たそがれ}ていた。

＼．．．．．

学校も終わり、今はお嬢様と寮の部屋にいる。

「はあゝ。つつかれた」

「お疲れ様です。お嬢様」

俺はテーブルにホットココアを用意した。

お嬢様はただ、「ありがとう」と言い、一口飲んだ。

「もう、12月か」

「早いものでございますね」

そんな感じでほっこりしていると、突然お嬢様は何か思い出したかのように、

「ねえ、朱雀」

「何でしょう?」

「あなた何か欲しい物ある?」

「どうしたのですか急に?」

「いいから」

「うん・・・今のところはございません」

「そう・・・じゃあ考えておいて」

「はあ・・・」

その後俺は仕事を済ませ、床についた。

『それにしても、お嬢様があんな事言うなんて・・・何か予定あったっけ? まあいいか・・・』

そして俺は目を閉じた・・・。

く・・・く・・・く・・・翌日、綱吉さんから霧の守護者が見つかったという報告を受け、学校から離れた所にある黒曜ヘルシーランドという所を訪れた。

「本当にこんな所にいんのか？」

佐久間がそうぼやくのも無理はない。この黒曜ヘルシーランドは外見も内面も誰が見ても廃墟としか見えないからだ。

「で、涼介」

「な、なんだ！」

「なんだじゃねーよ。早く離れろ」

「いやだつてこえーだろ！」

もう涼介は半泣きの状態だ。

「ハア……。大の男が泣くなよ情けねー」

俺は軽くツツコミを入れると、広い部屋に着いた。

「フフフツ。待っていましたよ・・・」

そこには、ソファーに座っている一人の男がいた。

「いやああああああ！！！！！！でたああああああ！！！！！！！！！！」

その場から逃げようとした涼介を佐久間と山本が首根っこを掴んで捕まえる。

「お前が霧の守護者。御堂 エイジだな」

俺がそう訪ねると、エイジは、

「フフフツ。その呼ばれ方はあまり好きではありませんね。私はマフィアと馴れ合うつもりはありませんからね」

いやマフィアじゃないから。自警団だから一応。

「じゃあ聞くけど、なんでボンゴレなんかに」

「あなたが欲しいからです」

「えっ！？何！？お前まさか・・・」

俺は若干引いた。

「言っておきますが、私はそういう趣味は全くありませんからね」

栄二はため息をつくと、

「まあ、良いでしょう。では、あなたの实力を見せていただきますし
ようか！」

栄二は三叉槍を地面に付けた。すると朱雀の周りに何人もの分身が存在した。

「この中から私を見つけれたらあなたの勝ちとしましょう」

「なっ！何だよこれ！？」

「ハア……。まずは落ちて着け涼介。それより……」

俺は再び栄二の方を見て、

「いいのか？こんなんで？」

「もつと数が欲しいと？」

「まあそんなところかな」

「いいでしょう」

すると分身はさらに増えた。

「よし。そんじゃ……」

俺は黒野から貰った死ぬ気丸を飲んだ。

ボウッ。

「始めようか」

俺は周りを見渡した。

「……………」

そして目を閉じた。

「……フウ」

すると額の炎がノッキングするように不規則に瞬きだした。

『何でしょうか？あの炎は？』

「・・・このまま待っているのも退屈です。こちらから仕掛けても構いませんか？」

だが、朱雀からの反応がない。

「では参りましょうか！」

分身のうちの五体ほどが正面から突っ込んできた。
すると朱雀は手を前に出し、先頭に突っ込んできた分身に触れて、

「死ぬ気の零地点突破初代エディション！」
ファースト

すると突っ込んできた分身は皆、氷付けになった。

「何っ！」

「あれは！」

「死ぬ気の零地点突破初代エディション！」

「いつの間にあんな技を！」

これに関しては少々時間をさかのぼる必要がある・・・。

「・・・」

「死ぬ気の零地点突破ですか？」

一体の巨人が現れた。

「あれは！」

「フハハハハ！さあどうしますか？」

「・・・・・・・・」

「フッフ。驚いて声も出ませんか」

「いや、逆だ」

「??？」

「ゾクゾクしてきた」

その言葉と同時に巨人からの一撃が来た。
しかし、俺はその一撃をかわし、

「いくぞ」

俺は右手を前に出し、

「いくぞ、イーザス形態変化」
カンピオフォルマ

形態変化したイーザスは俺の背中にブースターとなって姿を現した。
そこには二本の刀がクロスになって収まっていた。

「一気にケリをつけるぞ！」

「さあ。約束通り頼みを聞いてもらうぜ」

栄二も観念したのか、

「フフフツ。仕方ありませんね。いいでしょう」

そして俺が言ったのは・・・。

「・・・」時は過ぎて12月24日クリスマス。

俺はお嬢様と部屋にいた。

「お嬢様。少し付き合って欲しいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「どうしたのよ急に？」

「どうしても見てもらいたい物があるのです。お願いします」

「・・・分かったわ。で、それは何なの？」

「はい。それは・・・」
数分後・・・。

「で、何でこんな時間に並高に来なきゃいけないのよ」

「まあまあお嬢様、しばらくお待ちください」

すると、

「おお、朱雀、夏希！」

「よお、山本、佐久間、涼介」

「早かったな」

「いや。今来たところ」

「おお！お前たちもう来ていたのか！」

「お兄ちゃん！」

「ああ、お兄さん。それに雲雀さんも」

「何する気だい？高嶺 朱雀。変なことしたらただじゃおかないよ」

「大丈夫ですよ雲雀さん。つと、そろそろかな」

「何をする気なんだ？高嶺？」

「まあ見ててください」

俺は懐中時計を見ながら、

「5・4・3・2・1」

すると並高はイルミネーションと共に輝きだした。

「「「「うわあああああ！！！！！！」」」」

「ワオ・・・」

「凄いな・・・」

皆が喜んでいる中、

「サンキューな、栄二」

「まったく、頼みというのはこういうことでしたか。もっと大きな

ななことかと思いました」

そう、今俺たちが見ている景色は栄二の部下たちが作り上げた幻覚のイルミネーションである。

「あなたは相変わらず甘いですね」

「いいんだよこれで」

そう、これでいいんだ。

「お嬢様。私、今まで隠していた欲しいものを今ここで言わせてもらいます。とは言ってももう手に入れているんですけどね」

「何それ？」

「それは・・・」

俺はイルミネーションを見ながら、

「お嬢様も含め、ここにいるみんなの笑顔でございます」

「えっ・・・」

「私はこの笑顔をずっと見ていたい。何年経っても変わることのないこの笑顔を私は守っていきたい。そう思っています」
すると、雪が降り出した。

「栄二。これもお前がやったのか？」

「いいえ。これは本物の雪ですよ」

「ハハッ。これこそホワイトクリスマスだな」

すると校舎にある文が浮かび上がった。その文は、

『G i v r o e t e r n a a m i c c i z i a . . . 』

「何だあの文？」

「『永久^{とわ}の友情を誓う』って意味だよ」
実はこれも俺が栄二に頼んだことだった。

「これから俺はみんなと一緒にこの笑顔を守っていきたい。みんなに笑ってほしい。そんな願いがあるんだ」

「ハハッ。お前らしいな」

「まっただ」

俺たちはこの日、忘れられない思い出が一つ胸に刻まれた・・・。

聖夜の夜と雪と共に・・・。

クリスマス企画！幻影のイルミネーション（後書き）

年越しまであと2日を切りました。

今年はとても大変な年でしたが、しかあああああああし！！
！！！！！！

来年も死ぬ気で頑張っていきましょう！！！！！！！！
日本を元気にするために！！！！！！！！

皆さんの2012年に幸あれ！！（、ゝゞ

真実は霧の中でぐざいます(1)(前書き)

第13話

今回は久しぶりに謎説きです。

真実は霧の中でございます（１）

クリスマスも終わり、年を越した頃、お嬢様の携帯に一本の電話がかかってきた。

「やあ池沢君」

この口調、まさか……。

「おはようございます。風祭警部」

やっぱりあの人が……

「いきなりすまないが事件だ。場所は、並盛二丁目３３番地だ」

二丁目３３番地？確かあそこは……。

「分かりました。すぐ向かいます」

ピッ。

「朱雀。ちょっと出かけてくるわ」

「あの、お嬢様」

「大丈夫よ。ついてこなくていいわ。場所は分かるから」

「いえ、そういうことではなくて」

「行ってきました」

ガチャン……。

「行って……らっしゃいませ」

「……」 「んあー！分つかない！」

「どうやらお嬢様は今日の事件に相当お悩みのご様子ですね」

「ええ。つてあなたやつぱり来てたの？」

「はい。少し引つかかる事があつたので」

「引つかかる事？」

「そんなことよりお嬢様。事件の内容をお話してくれませんか？」

「無視か！ハア……」

「分かつたわ。よく聞きなさい」

「……」 「……」 「死亡していたのは、大嶺 おおみね 孝治 こうじ 31歳。死

因はナイフで心臓を刺されたことによる失血死。

第一発見者は妻の大嶺 おおみねけいこ 恵子。朝食だからなつてもリビングに来な

いのを不審に思い、呼びにいったらすでに死んでいた孝治さんを発見して通報したってわけ。

「大嶺 孝治と言いますとマジシャンで有名な」

「そう、マジシャンの家庭で生まれた孝治は両親をなくした後、跡取りの最有力候補として名を馳せていたわ」

で、その後集められたのは妻の恵子と次男の荒井繁信、三男の大嶺恭平、繁信の妻、荒井千夏、そして孝治の一人娘、大嶺由香の5人よ。

「皆さん、ここに集められた理由は知っていますね」

「は、はい」

「では、あなた方は昨日の午後9時ごろどこで何をしていましたか？」

そこで初めに答えたのは 恵子さんで、

「私は昨日の午後9時ごろは娘に勉強を教えていました。ここにいる繁信君と一緒に」

「それは本当ですか？ 繁信さん、由香さん」

「はい。確かに僕は恵子さんと一緒に由香ちゃんに勉強を教えていました」

「はい……。本当です」

『お嬢様。この時の由香さんのご様子は？』

『どこかぎこちない感じだったわ。まあ無理もないわ。実の父親が殺されたんだから』

で、その後答えたのは荒井 恭平とその妻、千夏で、

「俺は自分の部屋で読書してたよ」

「私は主人の部屋で先に寝ていました」

「そうですか・・・」

「その頃私は大嶺家の臨時の掃除係として潜入していました」

「バレなかったわよね？」

「ええ。大丈夫でした」

「なら良かったわ」

次に現場となった孝治さんの部屋に行ったんだけど、孝治さんは胸を刺されて椅子に座って死んでいたわ。近くには折れて血の付いた短刀が落ちていたわ。

で、しばらくまた捜査して今日は終わってたってわけ。

「その間私は掃除のフリをして家の中を捜査していました」

「あなた大丈夫だったの？」

「ええ。家の中とてもきれいだっただので、掃除する場所があまり・・・。その後私は手伝いのお礼をと言われて、大嶺家の皆様のマジックを見ることができました」

「へ・・・」

「繁信さんの写真を利用したマジック。恭平さんのコインを消すマジック。千夏さんのランプマジック。どれも素晴らしいものでし

た
ㇿ

「どう？ 朱雀。何か搦んだ？」

「ん・・・。私の捜査を含め、犯人の目星はつきましたがまだ決定的な証拠がありません」

「決定的な証拠？」

「これが必要ならば問い詰めても、しらばっくられて終わりでございます」

「じゃあどうしたら……」

「お嬢様。明日はまた捜査はございますか？」

「ええ」

「では、そこに私も賛同してもよろしいでしょうか？」

「はあ！？んな事出来るわけないでしょ！」

「そう言うと思ひまして・・・」

俺は服の裏ポケットから一冊の手帳を取り出した。

「作ってきました。警察手帳（偽装）」

「ええええ!!!」

「お嬢様。声のトーンがサ
エさんに出てくるのマ
オさんみたく
なってますよ」

「そんな事はどうでもいいわ！てゆうか、そんなもの作っちゃまずいでしょ！」

「ついでに明日もう一人来ますから」

「人の話を聞けええええええええええ！！！！！！！！！！！！」

羽日、大嶺家。

「で、来たもう一人って……」

「フフフッ。実に興味深いお話だったので来てしまいましたZ E」

「いや栄二君。最後のZE　　っていきなりキヤラ変えてくるのやめてよね。読者が混乱するから『えっ！？何！？コイツいきなりハイテンションになっちゃって！Angel Beats！のTになっちゃったの！ねえ！どうなの！』ってなるから」

『いや、お嬢様。そこまでいきませんよ。いくら読者でも』

俺が内心突っ込んでいると、栄二は

「OK! Don't Stop Dancing!」

「栄二。嬉しいのは分かったから黙っててくれる・・・Stop the Dancingで」

「面目ない・・・」

「・・・その後、俺と栄二、お嬢様で二手に別れて捜査した。」

「孝治氏の部屋」

俺と栄二は部屋の中をくまなく搜索した。

そして、鑑識の人に昨日回収した折れた短刀を見してもらった。

「どう思う？栄二」

「やはりあなたの読み通りですね」

「これでハッキリしたな」

すると孝治氏の机の引き出しからあるものを発見した。

「これは・・・手紙？」

「そのようですね」

そこに書いてあった内容は・・・。

「これは！・・・」

「同時刻、リビング」

私は昨日から引き続き事情聴取をしていた。

しかし得るものは昨日となんら変わらないもので終わった・・・。

「孝治氏の部屋」

捜査も切り上げようと思い、部屋を出ようとしたら、

ガチャ

「あ・・・」

「君は・・・」

そこにいたのは孝治氏の一人娘、大嶺 由香さんだった。

「あつ、ごめんなさい！捜査の邪魔でしたね」

「いえ、ちょうど終わった頃なので。何かご用でしょうか？」

「ちょっと中を見てもいいですか？」

「えっ・・・」

「ダメ・・・ですか？」

と、上目遣いで言ってきた。

俺は少し迷ったが、

「ええ。いいですよ少しなら」

「ありがとうございます」

「ですが、私はあなたの見張りとしていさせてもらいますが、よろしいですか？」

「はい。構いません。どうぞ自由に中を見ていてください」

そんな感じで俺は栄二を他に行かせ、由香さんの見張りをした。何もしないでいるのも暇なので、

「それにしても、本がたくさんありますね」

「はい。お父さんはマジックも好きでしたが本もこよなく愛していました。いつも小さい頃寝る前に本を読んでくれたのをよく覚えています」

『マジシャンでもあり愛読家……。そして、娘には毎晩本を読んであげていた……。いい父親だったんだな……。』

「いいお父さんですね」

「と言っても義理ですけどね。私、生まれてすぐ両親を亡くしてこの家に引き取られたんです」

「そう……。でしたか……。なんかすみません。聞いちゃいけないこと聞いたみたいで」

「いえ、そんなことはありません」

そのまま沈黙が続いた。

『まずい……。何か話さないと』

「あの……」

「は、はい」

「お願いがあります。犯人を……犯人を見つけてください！お願いします！」

そこにあつたのは、由香さんの必死に助けを求めるがあつた。
俺はふつと笑みを浮かべ、彼女の頭をなでた。

「安心してください。犯人はもう突きとめております。そしてそれが誰なのかはあなたも知っているはずですよ」

「え？……」

俺はそつと手を差し伸べ、

「さあ。参りましょう」

俺は由香さんと共に、この事件のケリをつけるために歩き出した……。

真実は霧の中でごまかいます（1）（後書き）

うん。

オリジナルの事件はやはり難しいですね。

真実は霧の中でございます(2)(前書き)

第14話

今回はどうも長くなりすぎました。

それでは謎解き後半戦スタートです！

真実は霧の中でございます（２）

リビングにはすでに栄二がお嬢様を含め、大嶺家の全員を集めていた。

「集まりましたね」

「あの、どうゆうことですか？これは？」

次男、繁信が尋ねてきた。

俺は変装に使っていたダテ眼鏡を中指で持ち上げながら、言った。

「皆さんに誰が犯人なのかここで申し上げるためです」

「「「え！？」」」

そこでは栄二以外の人間が驚いていた。

「だ、誰なんですか？その人は」

「今ここで言うことはできませんが、それではしらばっくれられて終わりにってしまうのでまず、事件の真相を先にお話しします」

「は、はい」

「まず、孝治氏は自分の部屋で椅子に座って死んでいた。そして凶器となった短刀は折れてカーペットの上に落ちていて、部屋は密室であった。ここまではよろしいですか」

「はい・・・」

「ここで私は疑問に思いました。まず一つ目は孝治氏はなぜ抵抗もせず、殺されたのか？二つ目は押収された折れた短刀について。この二つでございます」

俺は続けて、

「まず一つ目の疑問なぜ抵抗もせず殺されたのかについては普通なら誰だって殺されそうになったら誰しも抵抗するのは当たり前でございます。それが無かったということは、いきなり目の前に短刀が現れたとしか言えません」

「犯人がドアからこっそり入ってきたってゆう可能性は？」

俺はお嬢様の質問にこう答えた。

「失礼ながらお嬢様。お嬢様は部屋で一体何を見てきたのですか？そのような質問が出てきたとき私は危うく爆笑のツボにハマるところでしたがいちいち笑うとキリがないので説明に戻ります」

「なっ！」

「孝治氏の机は扉の向かい側。どんな人でも普通なら気づきます」

そこで恭平が

「じゃあ犯人は幻覚でも使ったと言っんですか？」

「そう、犯人は幻覚を使って孝治氏を殺害したんです」

「でもどうやって？」

「簡単です。幻覚で短刀を作り上げ、それを飛ばして孝治氏を殺した。それだけでございます」

「でも、幻覚ってゆう証拠は？」

「これでございます」

「これは・・・」

「押収された折れた短刀です。ここで二つ目の疑問のこの短刀ですが、この短刀にはいくつか不可解な点があります」

「不可解な点？」

ここからは栄二に説明を託した。

「それは私が説明しましょう。まず、一つ目は現場にあった短刀とこの短刀が別物だとゆう点です。現場にあった短刀は真ん中あたりが折れていて破片が散らばっていました。しかしこの短刀は真ん中は折れていますが破片が一つもありません」

「取り忘れたんじゃないのか？」

「私たちもそう思い、先ほどまで搜索しましたが昨日も含め、そんなものはありませんでした。その証拠に・・・」

栄二は手袋で折れた短刀を取り出し、折れた場所を合わせた。

「このように、破片を埋める場所などありません。つまり、この短刀は本物でも、現場にあった短刀は幻覚だということでございます」

するとお嬢様は、

「その根拠は？」

「これです」

俺は一枚の写真を見せた。

「これは？」

「鑑識が撮った現場にあった短刀でございます」

そこには、折れた短刀と立てかけてある鏡が端に映っていた。

「お嬢様。この鏡をよくご覧ください」

「え？この鏡を？」

夏希はその部分をジッと見つめた。そして気づいた。その「不可解な点」に。

「短刀が映ってない！？」

「はい。私もなぜこのような写真があったのか疑問に思いました。しかしその答えはすぐでした」

「何よ？」

「これです」

俺は一枚の手鏡を取り出した。

「この手鏡がこの仮説を確信に変えたのです」

「この手鏡が？」

「これは『真実の手鏡』というボンゴレの家宝の一つでございます。このように本物を映しても普通の鏡ですが、幻覚など物を映すと・・・」

俺は手に持っていたリングを鏡に映したすると、そこに映ったのはリングではなく、丸めた紙くずだった。

「あっ！」

「このように本来の姿を映し出します」

ポイツ。

「つまり、現場にあった短刀は偽物とゆうことになるのです」

「でも、何の為に？」

「おそらく、幻覚が長く保たないと思ったからでしょう。途中で消えてしまったら、元も子もないですからね」

「じゃあ、短刀を飛ばしたってのは？」

「孝治氏の部屋に意識を飛ばして短刀を作り上げたのでございます」

「そんな事出来るの？」

「少なくとも、中の上くらいの術士なら可能でございます。そしてそれが出来るのはただ一人・・・」

俺は家族に視線を変え、指差した。

「恭平さん。あなたですね」

「なっ！ちよつと待てよ！どうして俺なんだよ！」

「あなたは私にコインが消えるマジックを見せてくれました。その時、私は見たのです。いや、正確には『感じた』と言う方が正しいですね」

「感じた？」

「霧属性の炎を・・・ねっ」

！！！！

「それにあなたが今身につけているそのリング。それは霧属性のリングではありませんか？」

「っ！」

恭平は慌ててリングを隠した。

「やはりそうでしたか」

「なぜ俺だと分かったんだ？作戦は完璧だったはずだ」

「ええ。確かに完璧でした。一部を除いては」

「君に見せたマジックか・・・」

「はい。しかしなぜこのような事を」

恭平は少し黙り込んだ後、

「憎かったんだ。兄さんが・・・」

「後継者についてですか？」

「そうだ！兄さんは長男とゆうだけで後継者の最有力候補になった！それが憎かったんだ！」

「・・・分かりました。しかし、それはあなたの見当違いでございます。孝治氏は自分が後継者になることを望んでいませんでした」

「うるさい！お前に何が分かる！」

恭平はリングに炎を灯した。

すると、周りの空間が歪みだした。

「なっ！」

「・・・やはりな」

「どういう事朱雀？」

「この家自体が幻覚だとゆうことです」

「そんな！」

「ご安心くださいお嬢様。そのために『彼』がいるんです」

俺はそいつに視線を移した。

「栄二！」

「分かっています」

栄二は三叉槍を地面につけた。すると今まで歪んでいた空間はしだいに元に戻った。

「なっ！」

「幻覚を幻覚で返されたということは知覚のコントロール権を完全剥奪されたことを意味することは知っていますね」
はくだっ

「くっ・・・」

「話を戻します。さっきも言いましたように、あなたの見当違いでございます。その根拠は・・・これでございます」

俺は一通の手紙を差し出した。それは孝治氏の部屋で見つけたあの手紙だ。そこにはこう書かれていた。

「どうして・・・」

「愛する妻、娘、兄弟。そのすべてが彼には大切であり、守りたい絆だったからでございます。孝治氏は既に余命を悟り、このような行動に出たのでございます」

「兄さん・・・」

恭平は涙を流しながら、

「兄さん・・・ごめん・・・」

「その手紙はずっと持っていてください。これは孝治氏と家族を繋ぐ大事な手紙ですから」

「・・・」
「俺とお嬢様は栄二を見送り、帰ろうとしたその時、

「あの一！」

扉から由香さんが俺たちを呼び止めた。

「じゃっ、私は先に帰るわ」

「えっ！ちよっとお嬢様！？」

そんな事も聞かずお嬢様はそそくさと帰って行ってしまった。

「ったく・・・」

「あの・・・」

振り返ると既に由香さんは俺の目の前にいた。

「あの・・・今日はその・・・ありがとうございました！」

すこし頬を赤くしながら言ってきた。ちょっと、可愛いな・・・。

「いえ、私に出来ることをしただけですよ」

「フフッ。優しいんですね」

「どこがですか？」

「すべてです。お父さんの部屋にすんなり入れてくれたり、頼みを聞いてくれたり。普通ならありませんよそんな事」

「そうでしょうか？」

「あなた、警察ではありませんね」

ギクッ・・・。

「バレてましたか？」

「少なくとも私には。それにあなたがここに来るのもなんとなく分かっていました」

「なるほど・・・。さすがは予知能力を持った巫女シャーマンですね」

俺は昨日の疲れが溜まっていたせいか朝のHRは少しつらかった。
そんな中先生は、

「えゝ。今日は転校生を紹介する」

『転校生？こんな時期になぜ？まっ、誰でもいいか・・・』

「入りたまえ」

そこに入ってきたのは、

「「「「「おおっ！」「」「」」」」

「可愛い・・・」

「タイプだわ俺・・・」

『つたく・・・。転校生で騒ぐなよ』

「転校生の・・・です」

俺はその転校生の名前を聞かず、ただ声からして女子だということ
判断して机にうずくまっていた。

『しかし、この声。どこかで・・・』

「先生！俺の隣空いてまーす！」

『いるんだよね。こうでしゃばるヤツがクラスに一人、二人』

すると俺の隣で椅子を引く音が聞こえた。

『あれ？ああそつか・・・俺の隣も空席だったな・・・』

すると、その転校生は、俺に小声で呟いてきた。

「久しぶりですね」

「ん？」

俺は眠そうな顔をゆっくりと上げた。

「えっ・・・」

そう、そこにいたのは・・・。

「また会えましたね」

「由香・・・さん・・・？」

「ん？どうした高嶺？知り合いか？」

「へ？ああ。ええ、まあ・・・」

その瞬間、クラスの（男子の）視線が（殺気）俺に向いたのは言うまでもない・・・。

真実は霧の中でございます(2)(後書き)

うゝん・・・。

フラグ初めて立ちましたねo(^-^)o

それにしても、オリジナルの謎解きはやはり難しいですね(^ _ ^)
—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742y/>

謎解きはリボーンの後で・・・

2012年1月14日20時50分発行